

（セッション N0.16）「町民と大学生でふたばの未来を考えよう！」

○開催日時：平成27年9月19日（土）10：00～12：00

○場 所：広野町中央体育館（アリーナ）

○コーディネーター：丹波史紀 福島大学行政政策学類准教授

同大ふくしま未来学推進室地域コーディネーター 高橋あゆみ、新田真由子

発表者：福島大学 1年 湯村真帆、牧内美樹

2年 後藤誠智、橋本芳、木村元哉、 4年 杉原綾奈

○参加者数 約60名

○概 要

1. 第1部 学生発表

福島大学で取り組む地域実践学習「むらの大学」（住民との交流をとおして、現在の問題や将来起こりうる課題を福島から学び、原子力災害からの解決の糸口を見つける、主に1年生を対象とした地域を理解するための入口の授業）において、南相馬市や川内村での2週間の滞在実習や広野町でのスタディツアーをとおして見えた、まちの魅力や課題、私たちにできることを発表した。以下、実習地域別に発表内容を抜粋する。

【南相馬市】

2週間のフィールドワークをとおして、大きく、交通手段の不足、働く若者の不足、第一次産業の風評被害、コミュニティの崩壊などの課題を見つけた。その中でも特に、①農業の風評被害、②男性のコミュニティが少ないこと、③体を動かす機会が少ないことに着目し、南相馬市で「学生が農家のお父さんたちに農業を教わる機会」をつくり、お父さんの生きがいをつくることを出発地点として農家と大学、農家と学生のつながり（コミュニティ）の形成を図っていきたいという提案をした。

【川内村】

2週間のフィールドワークをとおして、全村避難から帰村をした住民の方々の声を抜粋して紹介した。例えば、①今の生活に満足している（不便さは感じながらも楽しみを見つけ生活をしている）、②大人が村の魅力を伝えていくべき（子どもの周囲で村の良さを大人が話すことが大切）、③交流の場がほしい、④考え方が閉鎖的な部分がある（村内では関わる人がある程度限られている）など。それらの意見を通じて、「村内の小中学生と大学生の交流の場をつくる」ことが私たち大学生にできることとして提案をした。

【広野町】

広野火力発電所や J ヴィレッジ、レストランアルパインローズ、新妻有機農園、防災緑地の植栽計画の現場などに訪問し、ヒアリングをして分かった町の現状や課題を報告した。具体的には、町民より作業員が多い中でどのようにその方々と関係性をつくっていくか、除染が進むなかで子どもの数を増やすための環境をどのように整えるのかなどの課題を取り上げた。

最後に、「私たち学生が考える被災地・ふたばの未来」について発言した。

- ・ 3.11 により避難した人と帰還してきた人、3.11 をきっかけに訪れることになった人それぞれが支えあって暮らしていく未来。
- ・ 3.11 前にあった地域の良さを活かしながら「新しいまち」をつくること。
- ・ 住民が故郷を誇りに思うまちづくり。

2. 第2部 フリートーク（会場からの感想、質疑応答）

第1部の発表に対して、参加者から感想や質問を受けた。海外招聘者や町外からの支援者から主にコメントをいただいた。「2週間でインプットした地域の現状をこれから消化してほしい」「その地域でどう地元の人が立ち上がっていけばよいのかという視点を持って関わってほしい」という感想のほか、「双葉郡に新しいコミュニティを再建する時に、広野町を再建することは必要か。どうやってそのプロセスを始めたらよいと思うか。それに対する学生の役割は。」「原子力事故を防ぐためには何が必要だと思うか。」「頑張っている人がいる中で、広野町ではなぜ大きな復興の動きが見えないと思うか」など、学生の考えをうかがう質問が多く聞かれた。

○クロージング（まとめ）

原子力災害により様々な経験をした地域の課題を、学生たちの目線で見るとの発表に対して、大変貴重な視点や考え方をいただいた。

- ・ 本セッションの成果
 - ー 外部の人間である学生が被災地に入って素直に感じることはどんなことなのか、どう見えるのか様々な視点から伝えることができた。
 - ー 大学生が町の復興に対してどんな関わり方ができるのか、そのひとつの事例を町民の方々に見ていただき、今後の参考とすることができた。
- ・ 今後の展開、方向性
 - 将来的に、広野町をはじめとする双葉郡地域で、「むらの大学」を横展開していく。行政や住民の皆さんとともに考え話し合いながらつくり、より双葉郡全体を考えていく取り組みにしていきたい。